列藩騒動録(上)

海音寺潮五郎

列藩騒動録(上)
海音寺潮五郎
© Kaionji Chogoro Kinenkan 1976

1976年1月15日第1刷発行
1988年11月8日第23刷発行

講談社文庫
定価はカバーに
表示してあります

発行者——加藤勝久
発行所——株式会社 講談社
東京都文京区音羽2-12-21 〒112
電話 東京(03)945-1111(大代表)
Printed in Japan

デザイン——菊地信義
製版——株式会社まゆら美研
印刷——豊国印刷株式会社
製本——株式会社若林製本工場

落丁本・乱丁本は、小社書籍製作部宛にお送りください。
送料小社負担にてお取替えします。 (庫一)

ISBN4-06-131325-8 (1)

講談社文庫

列藩騒動録

(上)

海音寺潮五郎

講談社

目次

島津騒動　七
伊達騒動　七〇
黒田騒動　一二七
加賀騒動　一八五
秋田騒動　二四四
越前騒動　三〇二
越後騒動　三四七

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

列藩騒動録

（上）

島津騒動

一

江戸時代の大名の家は、早晩貧乏に陥らなければならない仕組になっていた。

元来、大名の家は軍団というのが建前になっている。一旦緩急の際は、幕府の命によって出陣しなければならず、軍役が石高によってきまっている。慶安二年の定めによると、一万石につき、鉄砲二十梃、弓十張、旗三、槍三十、騎馬（将校）十人、人数二百三十五人となっている。十万石ならこの十倍、五十万石ならこの五十倍だ。これは最低限の軍備で、これだけは常備し、命令があればいつでも出せるようにしておかなければならない。つまり、いつもこれだけの人間には知行と扶持をあてがって無駄飯を食わせておかなければならないのだ。軍団であると同時に国家としての機能もあるから、公務員もおかなければならない。これは軍人と重複してもさしつかえはないが、両方の才のある人間は少ないから、そう経済的には行かない。

太平がつづけば、人間の生活が向上し、ぜい沢になるのは自然の勢いだ。大名の家は収入のふやしようがなく、あるいはふやしてもそう大はばにふやすことは出来ないから、貧乏になるより

ほかはない。大名の主収入は領地の百姓から取上げる田租だ。領地の広さはきまっている。新田の開墾をしたり、他の物産の生産を奨励したりしてみたところで、鎖国の時代では技術やなんぞの関係で、多きを望むことは出来ない。増収は年々にふえて行く失費をとうてい補うことは出来ない。

参覲交代の制度がまた拍車をかける。この制度はその主なる目的が大名の財力をそぐにある。何年毎に参覲するかは家によって違うが、大体において一年おきに交代するのだから、毎年半分は江戸住いする計算になる。江戸住いはいわば旅住いだ。旅先は何層倍の金のかかるものだ。それに往復の費用を算入すると、一通りや二通りの失費ではない。

手伝い普請というのもある。江戸初期には、江戸城をはじめとして、名古屋城、駿府城、丹波の篠山城、姫路城等を外様の大名らに手伝い普請させて築いたり、修理したりしたが、その後は河川の堤防つくりだの、川ざらえだのがある。勅使饗応役というのもある。いずれも金のかかること一通りでないことだ。

大名は貧乏になるのが、必然の運命であった。

もっとも、貧乏で潰れた大名は筑後柳川の田中家以外はない。その田中家の滅亡も、貧乏が直接の原因にはなっていない。貧乏で大阪の陣に出陣するのが手間取っている間に豊臣家がほろんでしまったので出陣せず、にらまれているところに、当主が養子をせずあとつぎがなく死んだので、情状酌量されることなく取潰されたのだ。

さて、薩摩の島津家のお家騒動も、その大本にさかのぼれば、貧乏からはじまった。島津家の貧乏は、そのはじめは何が原因というほどの取りとめたものはない。江戸時代の大名の家の必然

の運命によって、よほどに貧乏になって、八代将軍吉宗の頃にはもう七十余万両の藩債があったのだが、これに拍車をかけたのは、次の九代将軍家重の治世である宝暦年度に、木曾川の治水工事を命ぜられて果したことであった。

この工事にいくら金がかかったか、よくわからないが、四十万両を下ることはあるまいと言われている。この時代の藩主は重年という人だが、借金を苦にして、若くして死んでしまった。

次の藩主は重年の子の重豪だ。これはなかなか豪邁な人で、乱世の風雲時代に生まれ合わせたなら、英雄といわれるほどの働きをした人であろうが、碁盤の目のように秩序が定まり、鉄のワクのようにきびしい家格の規制のきまり切っている太平の世に生まれ合わせたために、英雄的気魄は鬱屈して、わがままとぜい沢になるよりほかはなかった。

重豪は金のかかることばかりした。藩黌造士館を建てた。天文学者を養い、天文館を建て、薩摩暦を出した。博物全書ともいうべき成形図説を出した。中国語辞典である南山俗語考を出した。長崎出島のオランダ商館長ヘンドリック・ヅーフや、商館つきの医者シーボルトと交りを結んで、さかんに西洋の品物を買いこんだ。薩摩の言語風俗は固陋であるとして鎖国策をやめて大いに他国人を入れ、言語改革をし、ぜい沢や遊びを奨励した。自らの生活も豪奢をきわめた。彼は娘を十一代将軍家斉が一橋公である頃にその夫人として縁づけていたので、家斉が将軍になると将軍岳父となったが、十五代の将軍の中で一番ぜい沢であったといわれている家斉が、

「薩摩のしゅうと殿のようにやりたい」

と、うらやましがったといわれるくらい、その生活は豪奢であった。

前代までによほどの藩債があるのに、こうぜい沢し得たのは、借金政策をとりつづけたからで

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

あるが、重豪五十六の時には、借金はついに重畳する山のごとくなり、どうにもこうにもならなくなった。

そこで、隠居して、子の斉宣が当主となった。

斉宣はこの時三十七だ。こんな年まで部屋住みだっただけに、父の政治ぶりにひそかな批判もあり、おれならこうするという経綸もあった。家を嗣いで三年目に、秩父太郎という者を登用した。

秩父太郎は、この時までお咎めを受け、蟄居を命ぜられていること七八年におよんでいる人物だったのだ。

秩父がなぜお咎めを受ける身になったかには、こんな話がある。

重豪の当主であった時代の末期、藩の苦しい財政のやりくりのため、薩藩領内はきびしい苛斂誅求が行われ、百姓らの苦しみはひどいものになった。ぼくの生まれ在所は鹿児島県の穀倉といわれるくらい良質の米を多量に産出するところで、穣々たる美田のつづく地帯であるが、山一重で肥後に接しているところから、この時代には百姓らの逃散する者が相つぎ、さしもの豊沃な美田が原野化するものが多かったと伝えられている。

この百姓らの苦しんでいるという話が、重豪の耳に入った。重豪は大目付の新納久命・島津久兼を召して、

「しかじかの由を聞く。調査して、報告するよう」

と、命じた。

「かしこまりました」

二人は郡奉行や目付らを召集して、
「近年ご領内の百姓らが、たつきに苦しんでいる趣きを聞召し、どの程度に苦しんでいるか、くわしく知りたいと仰せある。急ぎ調査の上、報告いたすよう」
と申し渡した。
「かしこまりました」
と、皆答えたが、目付の中で、ただ一人かしこまらなかったのが、秩父太郎季保だ。昂然として首をあげ、大目付らをにらんでいる。
「秩父、貴殿は？」
と、新納がとがめると、秩父は、
「百姓共は皆貧窮きわまり、今や餓え死せんばかりでござる。今さら調査する必要はござらん」
と、あらあらしく答えた。秩父にしてみれば、領民にたいする苛斂誅求も、百姓らの苦しみも皆知っていることだ、調査じゃの何じゃのといっていないで、重豪から下問があったら、即座に答申し、面をおかして諫言すべきであり、それが臣たるの道であるという肚があるので、大目付らの生ぬるさや、郡奉行や同役の目付らの官僚根性が腹にすえかねたのであろう。
秩父の手荒な態度に、新納は気色ばんだ。
「わしは君命によって申しつけている。調査の必要ないとは、貴殿は君命をなみするのか」
「調査とは実情を知るためのものでござる。このことは、すでに実情明らかでござる故、必要なしと申したのでござる。ご領内の百姓共は皆貧窮きわまり、餓死せんばかりでござる。一人のしからざる者なし。これが実情でござる。拙者はお目付でござる。知るところの実情を申し上ぐる

のは職分でござる」

新納は言いつめられてことばが出なくなったが、大目付の権威に関すると思ったのであろう、島津久兼が口を出した。やや皮肉な口調で、

「貴殿は郡奉行でもないのに、どうしてそんなことがわかるのだ」

秩父はぐいと向きなおり、はげしい目でにらみ、語気もあらかに言いはなった。

「近年お取立てのきびしいため、ご領内の百姓共の生活は難儀をきわめています。これは三歳の童児でも存じていること、お目付たる者が知らでなり申そうか。郡奉行に改めて調査させるなど、いらぬことでござる。早々にさよう申し上げられるがよろしゅうござる」

新納らは腹を立てたが、言いかえすことが出来ず、席は白けた。

秩父が退席した後、大目付らは相談して、秩父の同役の者を召して、秩父の言ったことは別として、上役にむかって態度不遜である、諭して進退伺いを出させるようにと、命じた。

同役がこれを伝えると、秩父は、

「拙者は職分をつくしたまでござる。何の罪あれば、さようなことをせねばならんのでござる」

と、はねつけた。

大目付らは益々怒り、家老に上申し、上長をしのぎ、秩序をみだしたという罪名で、秩父の職を免じ、蟄居を命じた。この時、秩父は二十九歳であった。

秩父の家は薄禄である。同時代の薩摩の学者で、造士館教授であった山本正誼（通称伝蔵、秋水と号す）の「文化朋党録」に、「季保、家貧にして余蓄なし」とある。貯蓄もなかったのである。

秩父が目付として受ける役俸は、彼の家の生活にとってきわめて大事なものだったのだ。免職になったのだから、忽ち生活に窮した。当時は社会の制度上、一族は共同責任体の形になっている。一族の連中らは、あと先き見ずの反抗などしてこげんことになって、迷惑千万じゃなどと言いながら、援助の手をさしのばしたが、秩父ははねつけた。

「いらん」

「いらんというて……」

「いらんからいらんというのじゃ。おはん方の世話にはならん」

「世話にならんというて、どうしなさるのじゃ」

「世話にならんというのじゃ。かまわんでもらおう」

けんもほろろな態度に、皆腹を立てて手を引いた。

秩父は邸内の空地を全部たがやして畠とし、麦を作り、野菜を次ぎつぎに輪作し、食料にもすれば、売って現金にかえもして生活し、まるでへこたれる様子のないこと五年間であった。

これだけでも普通の者には出来ることでないのに、夜間や雨の日には、朱子説によって儒学を講究し、特に朱子の著書で、その学問の精髄とされている「近思録」と、朱子の先学である周敦頤の「太極図説」についての研究は精到をきわめた。こんな節義の立て方は、いつの時代、どこであっても、最も見事なこととされる。まして、この時代の薩摩である。

「見事なもの！」

「あっぱれ武士！」

と、しだいに名声が高くなり、交りをもとめて来る者が出て来た。秩父はこの人々とともに、

一層精をはげまして、学問を研究していた。

最も気節ある武士として尊敬されるようになっていたので、斉宣(なりのぶ)も家を嗣ぐ以前から秩父を慕わしく思っていたのだが、父の怒りに触れて免職されて蟄居中の者を、当主になったからとて、すぐには登用出来ない。父にたいするあてつけと見られる恐れがある。それで、家をついで三年待って、もうよかろうと、登用する。先ず蟄居の罪をゆるし、三日目に裁許掛(さいきょがかり)に任命し、以後異常なスピードで昇進させ、一年四ヵ月後には家老に任命した。

二

斉宣が父の怒りに触れて咎めを受けていた秩父をこれほどまで思い切った任用をしたのは、なみなみならない覚悟があったからである。彼は経済的には緊縮政策をとり、風俗的には古風の質実さに返すことを意図した。それよりほかに藩政の建直しの方策はないと計算したのだが、これはいずれも父の取って来た方策と正反対のものだ。隠居しているとは言え、父はからだも達者、気力も旺盛、頭脳も卓抜だ。あるいは反対の意を表して、文句をつけかねない。とうてい普通の家老ではやれはせん、秩父ならやり得ると見こんだからであった。

斉宣のこの信頼に、秩父は感激した。そこで、かねての儒学研究のメンバーをそれぞれ抜擢して藩政の要職につけた。反対派の連中に言わせれば、――さしずめ、さっき引用した「文化朋党録」の著者山本正誼がそれで、私情をもって任用して権勢をかためることを図ったと言っているが、秩父の心事はそうではなく、しっかりとスクラムを組んでかからなければ、とうていやりぬ

けることではないと思って、学問をもって心魂を鍛えぬいていると信用している学友等から抜擢任用したのであろう。

ともかくも、スクラムの結成が出来ると、ばりばりやりはじめた。諸経費の節減、減税、諸門閥の権限制限、造士館の改革、諸役方の綱紀粛正、剛健な気風の復活等々々、法令雨のごとく下り、迅雷耳を蔽うにいとまなき改革ぶりであった。

重豪は江戸高輪の隠居邸にいたが、自分の施策を全面的に破棄し、まるで正反対のものを打ち出して行く、斉宣のやり方を、知らないかのごとく悠々とうそぶいていた。もっとも、改革の手はまだ江戸屋敷には及ばなかった。

しかし、やがて、秩父らは江戸屋敷でも大いに緊縮してもらうことにしよう、もし太守様の参覲交代を二三回休ませてもらうことが出来れば、財政建直し上、大いに効果があるから、将軍み台所にすがってその許しを得たいと決議して、この旨を重豪に相談してやった。

重豪は、可否は言わず、家老の一人である頴娃信濃を江戸に呼んだ。信濃は門閥出身の家老ではあるが、秩父らの改革方針に共鳴して、全面的に協力している人物であった。

信濃は心配しながらも上府し、重豪の前に出て、改革の趣旨を説明した。

「なるほど、ふん、もっともだ。いかさま……」

重豪は相槌を打ちながら、至ってきげんよく聞きおわり、その日は酒など飲ませて、退出させた。

国許でも、長の道中でも、一通りならぬ不安を抱いて来たのに、意外にも至って上首尾に聞きとどけてもらえたと思い、信濃は大喜びだ。旅館に帰ると、同道して来た諸役人を自分の座敷へ

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com